

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	布施 圭司
論文題目	ヤスパースにおける暗号思想と交わり思想の展開—交わりとしての思惟—		
<p data-bbox="183 360 438 394">(論文内容の要旨)</p> <p data-bbox="164 398 1428 551">本論文は、思惟の意義の変遷を軸として、「暗号」(Chiffre)思想と「交わり」(Kommunikation)思想というヤスパース哲学の二大契機が、ヤスパース哲学の発展においてどのように変化したかをたどり、暗号思想と交わり思想の関係を考察したものである。</p> <p data-bbox="164 555 1428 902">これまでのヤスパース研究では、『哲学』(Philosophie,1932)から、「理性」(Vernunft)と「包越者」(das Umgreifende)という概念が導入された『理性と実存』(Vernunft und Existenz,1935)や、特に『真理について』(Von der Wahrheit,1947)を経て晩年の『啓示に面しての哲学的信仰』(Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung,1962)へと至るヤスパース思想全体において、「暗号」と「交わり」の関係を明確化することは十分には行われてこなかった。両者の関係を明らかにするためには、局所的なそのつどの顕現である暗号と開かれた理性の統一の相即が問題の鍵となるが、顕現と開放性の扱われ方は著作間で変化が見られるので、その変化を綿密に辿る必要がある。</p> <p data-bbox="164 907 1428 1294">ヤスパースの思想には、「超越者」という思惟を越えたものが志向されつつ、哲学の方法として理性的思惟が重視される姿勢が見られ、思惟を越えたものと思惟の相克・相属がヤスパースの特徴と言える。その相即を理解するためには、「実存すること」における思惟の働きを明確化する必要があり、本論文はその試みでもある。近代的な合理性や主体の自立性に対する批判が盛んになされている現代の思想状況に対して、思惟に関するヤスパース思想の現代的意義は次のような点である。即ち、形式化する「道具的理性」とは異なる、交わりを遂行する理性、しかも単に抽象的な普遍性ではなく、自己存在の歴史性と相即した共同性を模索する理性を主張する点、また自立性を絶対視も軽視もせず、他者との交わりにおいて、そしてそれを媒介として超越者との関係において、自立性を位置づける点である。</p> <p data-bbox="164 1299 1428 1570">本論文は五章から成り、第一章で「実存」、第二章で「哲学的論理学」と「哲学的信仰」という基本的な術語を検討した後、第三章で「暗号」、第四章で「交わり」の発展を考察し、『啓示に面しての哲学的信仰』の地点から見た場合、ヤスパースにおける思惟は「交わりとしての思惟」であり、「自己否定して交わりを遂行する思惟」として特徴づけられることを論究する。最後に第五章で若干の他の思想との比較を行い、ヤスパースにおける「理性」と「交わり」の特徴を考察する。各章の内容は次のように要約される。</p> <p data-bbox="164 1608 1380 1641">第一章：ヤスパースにおける「実存」の概念と内実 —ケルケゴールとの比較—</p> <p data-bbox="164 1646 1428 1720">ヤスパースはケルケゴールの実存概念を受け継ぎ、それを元に自らの哲学を展開したが、両者には違いもあり、特に「現実」の意義が両者で大きく異なっている。</p> <p data-bbox="164 1724 1428 2069">ケルケゴールにおいては、真に実存するためには、どこまでも現実の世界にある自己を打ち捨ててキリストを模倣することが必要とされる。ここでは実存することと、人間がその内にある現実の世界とが、分離していると言えよう。ヤスパースは、経験的な自己存在にとっては世界内の事物は概念的に規定され対象的に把握されるのに対して、本来的な自己存在である実存にとっては世界内の事物は超越者の現象という意味を持つと考え、超越者の現象としての事物を「暗号」と呼ぶ。ヤスパースにおいては、人間がその内にある現実の世界は、我々がそのつどのパースペクティブに制限された内在者として差し当たり否定されるが、それが「暗号」となることによって、超越者に充実された言わば高次の現実となることが主張される。ここでは実存す</p>			

ることの現実と現実の世界の乖離が、暗号を媒介にして克服されている。

ケルケゴールは、実存することを究極まで純化させて捉えたが、かえって実存を非現実的・抽象的にしてしまった側面がある。確かに、ヤスパースにおいては自己否定という契機が先鋭化された形では表れておらず、信仰の核心である実存の逆説性が見えづらいことは否定できない。しかしながら、世界を越えた神秘的・非合理的な体験や、抽象的・概念的な絶対者ではない現実には、実存と超越者の関係を見出そうとするヤスパースの考えの意義は大きいと思われる。

第二章：哲学的論理学と哲学的信仰

ヤスパースは『理性と実存』（1935）以降は、思惟の自己反省である「哲学的論理学」（die philosophische Logik）と、実存の信仰である「哲学的信仰」（der philosophische Glaube）という二つの術語を用いて、実存と超越者の関係を論究するようになる。哲学的論理学は単なる思惟形式の反省に止まらず、対象的な認識を越え「包越者」（das Umgreifende）を感得させ、存在そのものへの視点である「根本知」（Grundwissen）を与えるものとされるが、空虚な反省に陥らないためには、実存という実質を必要とする。また哲学的信仰は対象存在を超越者の「暗号」

（Chiffre）として受容する実存の信仰であるが、それはまた「哲学的」と言われるように、哲学的思惟を契機として含む。

包越者論は、我々に対する現象が非対象的なものから生じることを覚知させ、暗号という現象を可能にする。また哲学的信仰は実存どうしの交わりにおいて成立するが、包越者論を踏まえることにより内在的な局所的な統一に止まらず、包越者という統一そのものを覚知することによって、実存同士の交わりは純正になる。この意味で、実存の信仰としての哲学的信仰は、思惟の思惟としての哲学的論理学を不可欠の要素とするのである。逆に、実存の超越者への関わりという内実を欠く哲学的論理学は、対象的認識の基礎づけ以上の意味を持たない故に、哲学的論理学も実存の信仰という実質を必要とする。従って、両者は相依相属していると言える。

第三章：「暗号」思想の展開

ヤスパースは超越者の現象としての事物を「暗号」と呼ぶ。この暗号の意味するところを、「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」として捉えることができる。可能性なき「絶対的現実性」（absolute Wirklichkeit）として超越者は出会われるとされおり、また暗号は解釈されえない、つまり他のものによってその意味を説明されず、そのものとして受け取るしかないものである。

暗号論は、最初の名著『哲学』（1932）において詳論されており基本的な概念はその後変更がないと思われるが、思想の構成の中での位置付けには変化が見られる。個々の暗号による充実と個々の暗号を越える開放という緊張は、『哲学』においても個々の暗号と「挫折」の暗号の緊張として語られていると言えるが、挫折も暗号として提示され、その関係は分かりにくいところがある。『理性と実存』（1935）や『真理について』（1947）では「哲学すること」の手段として存在・真理の分裂の統一を追求する「理性」が主張され、統一の象徴として暗号が提示される。同時に時間の内では真理の完結はありえないとされ、個々の暗号を越えた、無限の開放が言及される。『啓示に面しての哲学的信仰』（1962）においては暗号の闘争が明確に叙述され、さらに徹底的な世界からの超出、「全ての暗号の彼岸」が詳論される。この際、世界からの超出は自己否定する思惟の働きによることが明言され、同時に思惟は暗号の超出に留まることはできず、世界における暗号解読へと還帰することが主張されている。このような展開の背景には、ヤスパースの思索に「理性」が導入され、思惟する信仰である哲学的信仰と啓示信仰との関わりが主題化し、信仰一般の根拠や哲学的信仰と啓示信仰の違いの所以が論究され、思惟の働きが重要な契機になったことがあ

ると考えられる。

第四章：「交わり」思想の展開

ヤスパースは、自他が吟味し合い明らかとなる「愛ある闘争」としての「実存的交わり」を実存生成の場としている。交わりの基本的な概念は『哲学』（1932）以来大きな変更はないが、『理性と実存』や『真理について』（1947）では、「交わりの意志」、「統一への意志」としての理性が導入されたことにより、哲学の方法、超越者の探求の方法として、理性的交わりが位置づけられるようになる。理性自身は内容があるものではなく、悟性の局所的な統一を突破する否定性、悟性を無限に働かせる意志として作用する。逆に言えば、交わりの内にあり局所的であるという制限が踏まえられている限り、悟性の統一は超越者の統一の現象であることになる。超越者は全ての統一であるが、内在的な統一ではなく、開かれた超越的な統一であり、理性による無限の開放が超越者への道として語られる。『哲学的信仰』（1948）、『啓示に面しての哲学的信仰』（1962）では、「哲学的信仰」が理性を手段とする「交わりへの信仰」であると特徴付けられ、啓示に基づく「啓示信仰」との相互否定と相互承認の相即が論究される。哲学的信仰と啓示信仰は相互の交わりにおいてのみ純正でありうると言える。ヤスパース思想の発展のなかで、「交わり」の重要性は次第に増し、いっそう中心的なテーマになってくると言えよう。

『啓示に面しての哲学的信仰』の地点から「哲学すること」、「実存すること」に働く思惟を総観するなら、思惟は、内在者からの浮動とさらに個々の暗号からの浮動を遂行し、その上で全ての統一としての超越者を予期しつつ交わりを遂行する働きであると言うことができよう。そしてその浮動は、思惟が自らを否定することにより現出する。そこでヤスパースにおける思惟は、交わりを求めるという自己の働きを完遂することにより自己否定に至り、交わりの遂行へと還帰する思惟、「交わりとしての思惟」、「自己否定して交わりを遂行する思惟」と表現できよう。

第五章：「交わりとしての思惟」に関する他の思想との比較

本章では、「交わりとしての思惟」と特徴づけたヤスパースにおける「理性」の働きと、若干の他の思想との比較がなされる。

まず第一節では、カントの共通感覚（*Gemeinsinn*）とヤスパースの「交わり」を比較する。カントは「構想力」（*Einbildungskraft*）と悟性の調和に関する美学的判断の根拠として、「共通感覚」を想定しており、「共通感覚」は、人間の共同性に関わる概念である。カントは自己存在の叡智的な同等性を見てとったが、自己存在の叡智的なあり方は、内在的な相異を捨象した理想的な認識主観としての自己存在のあり方と考えられる。統一への意志としての理性の機能が十全に発揮されるのは、現実の自己存在同士が相違を越えて交わりを志向する際に理性が推進力となる場合と思われる。自他の相異という実存の根本的状況を踏まえた場合、実存の異質性に基づく交わりの非完結性によって超越的なものが開示されるというヤスパースの主張は、意義深いものと評価される。

次に第二節では、ヤスパースにおける非対象的なものに関わる理性の働きを論じた上で、同じく対象的思惟とは異なる思惟として、キェルケゴールの「実存弁証法」と山内得立の語る東洋思想の「レンマ」を取り上げ、ヤスパースと比較する。ヤスパースの考えでは、対象的思惟は主観と客観の分裂において成立するものであり、主客を包含する存在そのものである「超越者」を把握することはできない。超越者は、対象的でありつつそのことを打ち消すような「暗号」という形で、実存に現象する。キェルケゴールの考えでは、普遍的・客観的な認識をもたらす対象的思惟は、永遠に関わる「実存すること」においては効力を持たない。時間と永遠の関係は「逆説」であり、それに関わる主体的な思惟が、実存にとっては重要である。レンマの考え方で

は、現実の世界は「縁起」の世界であり、相互に対立する事物を前提にするロゴス的な思惟では捉えられない。世界は「無自性」でありつつ全てのものに成りうる「空」の現れである。ヤスパースの特徴としては、理性が悟性の制限を破りつつ、協同して働くとされ、非対象的思惟が単に反悟性的ではないことが明確化されていることが挙げられる。また、現実において交わりを遂行するという、積極的な世界への関わりが、超越者へのつながりでもあることが主張されている。これらのことによって、ヤスパースにおいては対象的思惟と非対象的思惟の相即性がよく捉えられていると言える。

第三節では、田辺元における対他関係の問題が検討され、ヤスパースと比較される。ヤスパースと田辺は、同一性論理の克服という姿勢が共通しており、世界内における実存同士の交わりを媒介とした絶対者の顕現を主張する点も軌を一にする。ただし田辺においては往還の相即という思想に裏打ちされた「否定即愛」の同時成立が説かれている。ヤスパースにおいては、自他の区別がより明確に維持されつつ、自他が交わり続けること、言い換えれば自他の区別があり続けることが、超越者の間接的な顕現であり、分裂にあつての統一への運動という側面が前面に出ている。

結び

ヤスパースは、基本的には思惟による自覚という知の立場に立ち、罪や救済という宗教的な契機は弱く、彼の「超越者」は生ける具体的な神ではない。またヤスパースは、統一や交わりを遂行する理性の由来について、思弁的に究明することはない。ヤスパースは人間にとって存在が分裂しており、理性という結び付ける働きが働いているという状況から思惟を展開し、絶対的なものと人間の間関係を模索している。このようなヤスパース哲学の性格は不徹底であるというよりも、思惟と実存を重視する為に敢えて不徹底なところに踏みとどまる一つの思想と受け取るべきだと思われる。

(論文審査の結果の要旨)

近年、カール・ヤスパースの『原子爆弾と人間の未来』(1958年)などの著作が改めて注目されており、その問題点も含めた多様な角度からヤスパースの哲学思想への関心が高まっている。本論文は、「暗号」(Chiffre)と「交わり」(Kommunikation)とをヤスパース哲学の中核的な思想契機と見なし、その二つの契機が彼の思想発展のなかでどのように変化したかをたどることによって、「暗号」と「交わり」との関係という角度からその哲学的意義を明らかにしようとした本格的なヤスパース研究である。

「実存」に対する超越者の現れをヤスパースは「暗号」と呼ぶ。したがって、暗号の思想は実存の概念と不可分であり、本論文の第一章はその実存の概念の解明に当てられている。論者は、ケルケゴールの実存と違ってヤスパースにおいては実存の場があくまで内在であることから、ヤスパースの実存が面する内在者は内在的でありつつ超越者を表わすという独特な存在となり、この超越者の現れ方が「暗号」となることを明らかにする。この議論によって、ヤスパースの実存思想の境位がどこに位置するかということが、最初に明示されることになる。

「暗号」と「交わり」との関係に取り組むためのもう一つの準備となるのは、第二章の哲学的論理学と哲学的信仰をめぐる論考である。哲学的論理学の中心をなすのは「包越者」(das Umgreifende)の議論である。ヤスパースによれば、主観と客観とを包むものであるところの包越者が暗号という現象を可能にし、哲学的信仰を可能にする。哲学的論理学は、思惟による思惟の自己開明を主題とするものであるのに対して、哲学的信仰は思惟を伴う実存の信仰であるが、いずれも「哲学すること」の表現である。論者はヤスパース哲学の重要な特質となるこのような思惟と信仰の関係を多くの著作をたどって丁寧に解明し、それによってヤスパースの「哲学すること」の独特の意味を浮き上がらせている。

この二つの章を踏まえて、本論とも言うべき第三章と第四章で、暗号思想、交わり思想の展開が論じられる。

第三章の最初に、論者は実存することは物事を暗号として受け取ることであり、という第一章の議論に基づいて、暗号が「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」を指すことを明らかにする。その上で、『哲学』(1932年)の叙述を詳細に検討し、この絶対的現実としての暗号の思想がどのように形成され、どのような意味をもつに至るかを解明してゆく。それを通じて、今—ここにおける物事の個別性ははっきりすればするほどその物事の経験は暗号の解読へと変わっていくということを、さまざまな角度から示して行く。そして、ヤスパースはあらゆるものが暗号となりうると語りながら、限界状況において経験される挫折こそ決定的な暗号の性格をもつことを論じるようになるが、そうになると、挫折における存在の顕現と、挫折と個々の暗号との相即という二つの様相をどのように捉えるべきかという新たな課題が生じてくることを、論者は明らかにする。論者は、この課題が『哲学』以後の暗号論の展開を導くと考えて、諸著作の叙述を丹念に辿って、その展開を跡づける。『理性と実存』(1939年)や『真理について』(1947年)では、暗号は「理性」、「愛」と並んで、「哲学すること」における真理の運動の一樣相であるとされることを示し、そこに出てくる「理性」が「哲学すること」の手段として真理の分裂の統一を追求する意志であることに注目する。この統一への意志は「交わりの意志」(Kommunikationswillen)にほかならないからである。また、『啓示に面しての哲学的信仰』(1962年)では、暗号を受け取ることが超越者の感得であるという面よりも、諸暗号が互いに否定しあう闘争状態にあるという面に焦点が当てられてくることが示される。この暗号の闘争の問題から、ヤスパースが「すべての暗号の彼岸」を語るに至る必然性を、論者は明らかにする。この第三章の論考は本論文のな

かで最も充実した部分であり、読み応えがある。

既にこれまでの章において、暗号と交わりとの連関は断片的に語られてきたが、第四章で交わりの思想が主題的に論じられる。ヤスパースは既に『哲学』において、実存は他の実存との交わりにおいてのみあること、「哲学すること」が交わりの促進と結び付いていることを語っているが、その後の思想展開において交わりということがいっそう重要性を増し、より中心的テーマとなっていることを、論者は諸著作の記述を迫りつつ描き出す。そして、交わりが重要性を増してゆくのは、「交わりの意志」としての「理性」が導入されたことによるということを示し、実存どうしの交わりが『啓示に面しての哲学的信仰』において哲学的信仰と啓示信仰との交わりという切迫した位相へ収斂してゆくことを明らかにする。交わりにおいて哲学的信仰と啓示信仰との一致が追求されるが、その追求は途絶せざるを得ない。しかしそこでなお、それぞれが相手に対して自らの欠陥を自覚する「試練」(Anfechtung)が起こりうることをヤスパースは主張する。このような叙述を吟味することを通して、論者はヤスパースの交わりの思想の射程を取り出している。

本論文の第一の意義は、以上のような暗号と交わりの関係を、考え抜かれた構成によって手堅く跡づけていったところにある。それは際立って目新しい知見をもたらすものではないが、実存、哲学すること、包越者、暗号、哲学的信仰、理性、交わりといった根本概念を、その思想の展開に即して明確に位置づけ、ヤスパース哲学の輪郭をはっきりと浮き上がらせることを可能にした。それは、現在の研究状況のなかでのヤスパース哲学の論じ方として、まさに必要とされるものだとすることができる。

そして第二の意義は、実存や信仰という位相で展開されるヤスパースの「交わり」思想に、現代の世俗的なコミュニケーション論を越える新しい可能性を見ようとしている点にある。対話やコミュニケーションを扱う論考が近年、倫理学や社会学などの領域で数多く見られるが、それらが扱っているのは情報伝達や意思疎通や異文化理解といった段階での交わりに止まっている。自己存在の根底にまで立ち返って、信仰の根幹にまで及んでゆくような次元での交わりが可能であり且つ重要であることを、本論文は主張している。この主張の現代的意義は大きい。

だが本論文に問題がないわけではない。それは第五章に表れている。第五章は、カントやケルケゴール、田辺元などの思想と比較することで、ヤスパースの交わりの思想の特質を明らかにしようとする論考である。それはヤスパースの思想をより広い思想的連関のなかで捉え直そうとする試みであるが、表面的な比較を越えてはいない。それは論者の今後の課題を示すものである。しかし、この章は付論という性格のものであって本論文の趣旨は第四章までで完遂されており、本論文の意義は疑いえない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年8月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。